中公新書 1769

秋山弘之著

苔の話

小さな植物の知られざる生態

中央公論新社刊

A．長野県上高地のクロカワゴケ群落

B．赤黒い蒴を持つマルダイゴケ

①オオスギゴケ

②ホソバオキナゴケ

③ヒノキゴケ

④ハイゴケ

⑤コバノチョウチンゴケ

⑥コツボゴケ

⑦タチゴケ

⑧ギンゴケ

⑨ヤノウエノアカゴケ

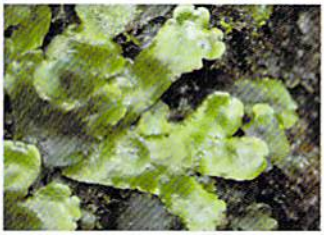
⑩ハマキゴケ

⑮ヒジキゴケ

⑪フタバネゼニゴケ

⑯トヤマシノブゴケ

⑫ジャゴケ



⑰イクビゴケ

⑬オオミズゴケ

⑱キヨスミイトゴケ

⑭カガミゴケ

「代表的な苔20選」（p.197～206）参照. ⑥⑮⑱は平岡正三郎氏撮影

C．原糸体が半球状に生育するミスズゴケ
（樋口澄男氏撮影）

D．スナゴケの湿った状態
（上）と乾いた状態

E．ヒカリゴケ群落（山口富美夫氏撮影）

はしがき

ものの見方や心の感じ方が、育った環境に影響されるのだとしたら、「日本人」の感性は、川や山といった命を持たないものばかりでなく、そこにいる自然の生き物たちとの関係にそのいしずえがあるにちがいありません。そしてすべての生き物に、安住の住処と命をつなぐ食物を与えているのが植物なのです。森や草原といった広がりを持った環境を見るとき、まず初めに目に映るのは、木や草、そしてシダといった体の大きな植物たちにちがいありません。しかし、腰を下ろしてじっくりと地面を眺めるならば、ずっと小さいのだけれども、実に不思議な魅力に富んだ苔たちの世界がそこに広がっていることに気づくことでしょう。

意識しないと気づかない世界。そう、ゆっくりと落ち着いた気分であることが、苔とつきあううえで大切なのです。一度この感覚を得られれば、道端にも、街路樹の幹にも、校舎の屋上にも、その目で見てみればあちらこちらに苔がいることに気づきます。ふだん私たちは彼らをただ見過ごしてしまっているだけなのです。それは苔が、ほかの植物たちと比べてずっと小さな体をしていることが理由なのですが、実は苔が持つ数々の不思議な性質も、この体が小さいということに由来しているのです。細胞の表面にちりばめられた不思議な模様に

も、また蒴の縁取りの構造の妙と、胞子を飛ばす際の実に理にかなった絶妙な動き。はっと驚かされる工夫が、小さな体のあちらこちらに秘められています。それはあたかもコンピュータの集積回路のようです。残念ながら人間の目ではちょっと倍率が足りませんから、詳しく観察するには虫眼鏡が必要なのですが、安いものでも大丈夫。これ一つあればぐっと世界が広がってゆきます。

苔を求めて苔庭を訪れるなら、梅雨の時期にかぎります。たっぷりと体中に水を染み渡らせ、いきいきとした苔たちが、濃淡実にさまざまな緑の色で、しっとりと雨に打たれています。どんよりとした空の色も、かえって苔の魅力を増すようです。夏の盛り、晴天の日が続くと、見かけがすっかり変わってしまいます。干からびてしまい見るからに哀れな姿をさらしているのですが、実はここにこそ、地球の歴史の中で苔が過酷な環境を生き延びてきた秘密が隠されているのです。

鮎が食べるものも、熱帯魚の水槽に生える厄介者も、そして古びた家の壁を緑色に染めるものも、みなまとめてコケと呼ばれています。コケという言葉は、地面に広がる、平べったい植物すべてを指し示すものとして用いられてきました。私の勤める博物館には一年を通じてさまざまな問い合わせがありますが、よくある質問の一つが、裏庭の隅に生えている黒く

てぶよぶよした「コケ」の正体を尋ねたものです。これはイシクラゲという藍藻（正確には藍色細菌）の仲間なのですが、このような誤解があることは、一方では美しさを賞讃される苔であり、他方ではできれば触りたくない苔、正と負両方のイメージが現代の人々の間にあることをよく示しているのではないでしょうか。では、もっとずっと自然が豊かだった時代、人は苔にどのような想いを込めてきたのでしょう。そして、本当の苔とはいったいどんな植物なのでしょうか。

世界に二万種もある苔ですから、なかには変わった生き方をする種類があります。水に浮かぶ苔、焼け跡ばかりを好んで徘徊する苔、なかには汲み取り便所のそばばかり選ぶものや動物の排泄物や死骸をその住処とするものまであります。彼らは、いったいどういう理由でそのような場所を選んでいるのでしょうか。

苔について何も知らない状態から私が勉強を始めてから、二〇年余りが過ぎました。何事に対しても飽きやすい性格がわざわいして、これまでに手を出したなかには長続きするものは少なかったのですが、時に応じてその関わり方に濃淡はあったにしても、ただ一つ苔だけはずっと生活の中心であり続けてきました。そして今では苔を調べることが職業でさえあります。振り返って改めて感じるのは、苔というのは知れば知るほど不思議な植物だなあとい

うことです。この感覚をほかの人に伝えたいという気持ちから、この本を書き始めました。苔の知られざる側面に光を当てながら、さまざまな疑問に答え、苔をよく知らない人にも楽しく読めるよう、苔をめぐる興味深い話題を中心に、ときには私たちの日々の生活との関わりの面から説き起こすように努めたつもりです。苔庭散策の前にでも読んで知識を仕入れていただければ、同行の人たちにすごいねと感心してもらえるという実用的価値もあるかもしれません。また、苔の名前はすでにいくつか知ってはいるけれどももう少し詳しく知りたい人にとっても、この本を読むことでさらに苔への興味が深まるよう、多少専門的な事柄についても踏み込んで触れている部分があります。たとえば世代交代の話などでちょっと難しいなと感じたときには、わかりにくいところは棚上げにしたまま読み進んでください。

いま、室内インテリアとして苔がもてはやされています。しかし、本来野外でひっそりと生きている苔が、本当に部屋の中で生きてゆくことができるのでしょうか。枯れたらゴミ箱ゆきの、使い捨てにされているのではないかと心配です。ブームが仇となって、かえって苔が疎まれるようにならないともかぎりません。本書を読まれた方が苔のことをより深く知り、育てにくさや扱いにくさも含めて、苔に対する愛情が深まるとしたらこんなうれしいことはありません。

目次

はしがき

第1章　コケ学事始め……3

根を持たず胞子で増える　5
受精の仕組みと胞子体　8
戦略としての短い一生　11
ドュリングの分類　14
分枝で年齢を推定する　18
陸上植物の起源の謎　20
蘚類、苔類、ツノゴケ類　23
オスとメスの不思議な関係　31
なぜ名前がわからないのだろう　39

第2章　おそるべき環境適応能力……47
極寒の極地から熱帯雨林まで　48
隔離分布の不思議　53
人の生活とともに　59
渓流沿い植物　64
動物の餌となる　70
苔を住処とする生き物たち　74
枯れても死なない　79
適応と受容のハーモニー　84
銅ゴケの謎　87
変わった環境に生きる　91
ヒカリゴケをめぐる話　94
第3章　苔はこんなに役に立つ……103

装飾と鳥の巣　104
味と匂いの不思議な成分　113
大気汚染の指標　120
森をはぐくみ水をためる　125
熱帯魚と暮らす　132
洋の東西、苔の利用法　139

第4章　苔に親しむ……147

苔と日本人　148
一足早い新緑　155
名前にこだわらない　161
新種の記載　164
野外観察に出かけよう　169
観察のテクニック　172

苔を退治する　176
手間のかからない栽培法　178
庭に苔を生やすには　181

あとがき　185
図鑑活用術　188
代表的な苔20選　197
苔庭ガイド　207
おもな参考文献　212
索　引　216